



ふるさと発見 ちがさき丸ごと博物館

第42号
2026.8.1



愛称は「ちがさき丸ごと博物館」



丸博百景No.6 「浜須賀歩道橋から海を望む」

丸博百景では誰でも自由に入れる景勝地を紹介しています。

時空を超えた「旧相模川橋脚」が開く、地域再発見の扉！

今年、下町屋にある「旧相模川橋脚（きゅうさがみがわきょうきゃく）」が国史跡に指定されてから100年という、大きな節目を迎えます。

1923（大正12）年の関東大震災によって突然地中から姿を現したこの橋脚は、中世の橋梁（きょうりょう）技術や鎌倉幕府の家臣の活動を今に伝える貴重な遺跡として評価されています。

800年を超える時を経て残った橋脚は、当時の相模川の姿や人々の往来を思い起こさせ、地域の歴史をたどる確かな手がかりとなっています。

今回の季刊誌では、この遺跡を出発点に、周辺地域に息づく歴史、民俗、伝承、そして人物など、魅力ある都市資源の数々を、丸博（エコミュージアム）ならではの視点で紹介します。

さあ、丸博流 誌上ツアーに出発しましょう！

旧相模川橋脚

茅ヶ崎駅から国道1号線沿いを平塚方面へ30分程歩いた下町屋橋手前の左手、県の衛生研究所のそばに、国の史跡および天然記念物である「旧相模川橋脚」があります。

1923（大正12）年の関東大震災によって水田から現れた橋脚の跡で、歴史学者の沼田頼輔（ぬまたらいすけ/よりすけ）が、鎌倉幕府が編さんした歴史書である『吾妻鏡』（あづまかがみ）に基づき、「出現した橋脚が鎌倉時代の1198（建久9）年に源頼朝の重臣 稲毛三郎重成（いなげさぶろうしげなり）が亡き妻（源頼朝の正室政子の妹）の冥福を願い、供養のために旧相模川に架けた橋の橋脚である」と考証し、1926（大正15）年に国の史跡として指定されました。

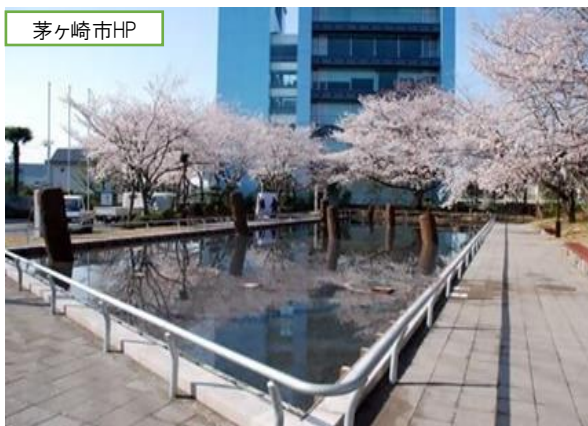
史跡になって以来、橋脚は池の中で保存され、下町屋の青年団中心に防腐剤を塗布したり、隣接地所有の武藤工業を中心に保存池の改修が行われたりと地域の人々に守られてきました。

さらに、2001（平成13）年以降に行われた整備発掘調査により、関東大震災に伴う多数の自然現象が発見され、2013（平成25）年に液状化現象としては全国初の天然記念物（地質鉱物）として指定されました。

このように国の史跡および天然記念物として二重に指定されている例は全国的にも大変珍しい遺跡です。

10本の橋脚は現在では地中に埋め戻して保存するとともに、その上部にレプリカを配置し、モニュメントや解説板を配して公開しています。また、その池を囲むように20本程の桜が植樹され、満開の季節には花見客も多く、人々の憩いの場となっています。（K・H H・N S・F）

茅ヶ崎市HP



「旧相模川橋脚」の保護に関わった方々

橋脚の発見/和田 清（わだ せい）

神奈川県高座郡鶴岡村萩園（現在の茅ヶ崎市）に生まれる。震災の時には、東京帝国大学の講師として東京にいました。が、東海道線の復旧を機に帰省した折、下町屋橋脇の水田から出現した丸柱の話を聞き、直ちに実地検分をしました。そこで、水田から出現した丸柱を眼前にして歴史的遺産であることを直感し、丸柱の出現状況を撮影後、より詳細な調査研究が必要であると考え、写真を歴史学者であり考古学にも詳しい沼田に送り、その後の調査研究を託しました。和田は、「旧相模川橋脚」の文化財としての価値を最初に見出したことから、茅ヶ崎の文化財保護活動に大きな足跡を残したといえます。（H・N）

茅ヶ崎市HP



出現時の様子（1924年）

調査と考証/沼田 頼輔（ぬまた らいすけ/よりすけ）

茅ヶ崎にゆかりが深いことから、和田から託された実地調査を震災の翌年に行い、歴史遺産として橋脚の位置や出現状況を実測し、地震によってせり上がった橋脚について記録を残しました。また、『吾妻鏡』などの文献資料に基づいて鎌倉時代の相模川の橋脚であると考証し、『歴史地理』『東京日日新聞』紙上に発表しました。沼田は、和田とともに「旧相模川橋脚」の保存について、当時の茅ヶ崎町や内務省へ働きかけ、国史跡指定への道筋をつけたことから、茅ヶ崎の文化財保護活動に大きな貢献をしたといえます。（H・N）



保存に向けて/柴田 常恵（しばた じょうえ）

内務省地理課嘱託の史跡名勝天然記念物調査会考査員となり、政府における数少ない考古学の専門家として、震災当時も文化財保護行政を担っていた柴田は、和田や沼田の働きかけに応じ、橋脚の調査を実施し、保存に向けて動きました。そして、橋脚は、1924（大正13）年4月25日に神奈川県により仮指定され、1926（大正15）年10月20日に国史跡に指定されました。震災後の混乱期にありながらも史跡指定まで素早くなされたのは、文化財保護行政における柴田の存在が大きかったといえます。（H・N）

思いを引き継ぐ/大岡 実（おおおか みのる）

1978（昭和53）年発行の『神奈川県文化財図鑑 史跡名勝天然記念物篇』において、「旧相模川橋脚」の執筆を担当し、建築史家の立場から、「旧相模川橋脚」は中世以降に主流である丸柱であり、水中にあった木材は非常に長年月の耐久力をもち保存がよく、また大気中に晒されても鎌倉時代の木材は古建築に多量に残っていることから、創建当時のものとして差し支えないことを考証しました。大岡は、和田、沼田、柴田の調査研究と思いを引き継ぎ、「旧相模川橋脚」の文化財としての価値をより明確にしたといえます。（H・N）

頼朝落馬事件と弁慶塚



源頼朝は、1198（建久9）年12月、御家人稲毛三郎重成が相模川に架けた橋の落成供養に参列、その帰り道、鶴嶺八幡宮の辺りで義経主従などの亡霊に会い、落馬して翌年の正月に死去した（『保暦間記』（ほうりやくかんぎ、著者不詳 南北朝中期成立の史書）『吾妻鏡』）とあります。

村の人々は義経主従一族の霊を慰めるため、浜之郷に「弁慶塚」を作り、600メートルほど離れた「鳥井戸御霊神社」（とりいどごりょうじんじや）に義経の霊を合祀したと言われています。このことは、中世の歴史書『保暦間記』（1156～1339年の出来事を記録）にも記述が見られると、1879（明治12）年の『皇国地誌村誌（浜之郷村の章）』に書かれています。

弁慶塚については、『茅ヶ崎の民話劇』にも言い伝えが紹介されています。「ある日、弁慶が義経の使いで鎌倉へ行く途中、鎌倉街道浜之郷辺りで火事を発見。火の海になったその家から、住人の父娘を助け出しました。村の人々は弁慶亡き後、お礼の意味も込めて塚を建立した…」とのこと。真偽不明の話ではありますが、全国各地に史跡や逸話が残っている義経と弁慶は、その理想的な主従関係で長く日本人に愛されてきたことを改めて強く感じました。「旧相模川橋脚」周辺には、800年の時を超えて、頼朝、義経、弁慶など歴史上の人物を身近に感じられる場所が多く残っています。（K・H R・S）



「旧相模川橋脚復元模型」（茅ヶ崎市博物館所蔵）

なんどき橋の幽霊



昔、茅ヶ崎に今宿橋という橋がありました。夜になるとあたりは不気味な静けさでした。そんな茅ヶ崎村の南湖に、南二郎と言う若者がいました。ある日、平塚の遊郭へ遊びに行った南二郎は、トキノという遊女とすっかり気が合っていました。

南二郎は忙しい日々が続く、数ヶ月トキノと会えませんでしたが、「南二郎さんに一目会って死にたい。」と言いながら、息を引き取りました。トキノの執念は、南二郎がいつかはきっと渡るであろう今宿橋へ夜ごとに魂だけが現れ、「南二郎さん、トキノです」と叫ぶようになりました。村人の耳には、それが「なんどきよー、なんどきよー」と聞こえるのでした。

ある夜明け前、旅人が今宿橋に差し掛かった時、急にあたりが暗くなり、橋の下から白い手がニューと伸びてきて旅人の足を掴んだのです。「なんどきだー」と言う女の声に、「あ、あ、明け方だー」と大声を上げると、手は橋の下に消え、あたりは元の明るさに戻りました。この時、夜中の時刻を答えた者にはしつこく付きまとい、橋を渡る旅人たちから恐れられるようになりました。この話が江戸まで伝わり、誰言うとはなしに「なんどき橋」と言われるようになりました。（「茅ヶ崎の民話劇 第一集」より抜粋）

サザンの「勝手にシンドバッド」の「今何時？ そうねだいたいね〜♪」の歌詞は、「なんどき橋」が由来だと言う噂があるようですが、あなたは信じますか？（S・F）

景能祭（かげよしさい） ～5月10日に開催される～

市内円蔵地区では2002（平成14）年から景能祭が地元の団体により開催され、いまではすっかり地元で定着した祭りとなっています。

祭りの主役となる懐島景能（ふところじまかげよし）は、鎌倉時代の幕府の有力御家人で、懐島（ふところじま：今の円蔵、西久保、今宿、下町屋、浜之郷一帯）の領主でした。この景能を顕彰するためにおこなわれているのが「景能祭」です。開催時期は毎年5月の上旬で、会場は円蔵神明大神宮境内です。さらに今年は、和田の乱（1213（建保元）年）で一族が滅亡したと伝えられていた景能のご子孫が、現在もご健在であることが判明し、札幌と福岡から祭りに参加されました。地元の皆さんは大いに歓迎し、会場は大きな話題と感動に包まれました。「景能祭」は、茅ヶ崎の新たな都市資源として注目されており、来年も開催が予定されています。華やかな武者行列や奉納演劇などをぜひ地元の皆さまと一緒に楽しんでいただければと思います。（M・K）



茅ヶ崎市博物館：旧相模川橋脚国史跡指定100年記念展示（展示解説・関連講演会・体験イベントあり）

ちがさき今昔（こんじゃく） — 古相模川編（ふるさがみがわへん） —

萩園・今宿・下町屋・柳島のあたりに流れていた「古相模川」（相模古川）流域には、縄文、鎌倉、戦国～江戸、江戸～明治と様々な景色が広がっていました。展示を通して今と昔を行き来してみます。

会 期：2026. 7. 25(土)～10. 20(火)(休館日：月曜日(休日の場合は開館、翌平日休館))

開館時間：9:00～17:00(最終入館16:30) 観覧料：無料

詳細はチラシ、博物館HPをご覧ください

トピックス



「旧相模川橋脚」そばで長く愛された「でかまん菓子舗」は、2024（令和6）年6月に惜しまれつつ閉店しました。最大30cm超の名物“でかまん”は、甘さ控えめのこしあんがぎっしり。慶事などで家族や仲間とワイワイ切り分けた時間が、茅ヶ崎の思い出として残っている方も多いはず。1951（昭和26）年創業当初は別の屋号でしたが「もっと大きくできない？」という客の声から巨大饅頭が誕生し、やがて“でかまん”が店名に。街と客に育てられた店であり、気さくな職人夫婦が守り続けた味は、これからも多くの人の胸にそっと残り続けるでしょう。（K・M）

トピックス



2025（令和7）年生まれの女の子の名前1位は「翠」（すい）。なんと涼やかで、色そのものが名前になっているのが素敵です。

この“翠”をまとった鳥といえば、やっぱりカワセミ。漢字では「翡翠」とも書きます。宝石ヒスイの名はその羽色に由来するというのもロマンがありますよね。清流の鳥というイメージですが、実は市街地の公園や相模川、小出川、柳島海岸でも普通に出会える存在。水面にダイブして小魚を狙う姿に遭遇できたら、ちょっと得した気分になれるそうです。（K・M）

丸博アクションプロジェクトに新しい仲間が加わりました！

市民と行政の協働組織 丸博アクションプロジェクトに2026（令和8）年度から宮下良子さんと板谷孝雄さんが新メンバーとして加わりました。お二人にはそれぞれの得意分野を活かして、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の運営を担っていただきたいと思います。丸博アクションプロジェクトでは毎年2月～3月頃に新しい仲間を募集しています。茅ヶ崎をもっと知りたい。茅ヶ崎を誰かに伝えたい。そんな思いをもとに私たちと一緒にアクションしてみませんか。

募集要項はちがさき丸ごとふるさと発見博物館のホームページや広報ちがさきでお知らせする予定です！少し先ですが、ぜひチェックしてみてください。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館ってなに？



2003（平成15）年よりエコミュージアムという理念のもと、茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材（もちろんあなたも）などの「このまちらしさ」をもつ、いろいろな事柄を幅広く選び出し、これらの都市資源を調査・研究し、それぞれを関連付けて活用を図るのが、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」です。

この活動を通じて茅ヶ崎を知り、茅ヶ崎を好きになり、茅ヶ崎を誇りに思う人を増やし、まちの活性化につなげていきます。ぜひ皆さんも私たちと一緒に丸博に参加しませんか。

編集後記

2026（令和8）年度、2名の新しいメンバーを迎えて、季刊誌の編集作業でアクションプロジェクト〈13名〉が始動。今回、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」は市民の一人一人が学芸員であるという視点で、「茅ヶ崎にふるさとを見出そうとする人」「茅ヶ崎というふるさとで都市資源（茅ヶ崎の宝物）を発見しようとする人」、そうした方々の動き出すきっかけになれるような、子どもから大人までが読んで「これだ！」と魅かれるような紙面作りを第一の編集方針で作りました。誰もがちがさき丸ごと博物館の仲間です。この博物館を是非訪ねてくださいね。（R・M）

